

應劭『風俗通義』皇霸篇訳注稿（下）

道家 春代

本稿は、後漢應劭『風俗通義』第一、皇霸篇の訳注である。(上)は『名古屋大学中国語学文学論集』第三十二輯(二〇一九年二月)に掲載した。本文には原則として呉樹平『風俗通義校釋』(天津人民出版社、一九八〇年)を用い、王利器『風俗通義校注』(中華書局、一九八一年)、香港中文大學中國文化研究所『風俗通義逐字索引』(香港・商務印書館、一九六六年)、趙泓『風俗通義全訳』(貴州人民出版社、一九九八年)、及び季嘉玲『風俗通義校注』(『臺灣師範大學研究所集刊』第二十一號、一九七七年)を参照した。残念ながら朱季海『風俗通義校箋』(學術書林、一九九六年)は入手できず、見ることができなかった。

目次

5 六國

(楚／燕／韓／魏／趙／田齊／謹按)

5 六國

(楚)

楚之先出自帝顓頊(1)，其裔孫曰陸終，娶于鬼方氏，是謂女潰。蓋孕而三年不育，啓其左脅，三人出焉，啓其右脅，三人又出焉(2)。其六曰季連，是爲芈，其後有鬻熊子爲文王師，成王舉文、武勲勞，而封熊繹於楚，食子男之采(3)，其十世稱王(4)。懷王佞臣上官(5)、子蘭(6)，斥遠忠臣，屈原作離騷之賦，自投汨羅水。因爲張儀所欺，客死於秦(7)。到王負芻，遂爲秦所滅(8)。百姓哀之，爲之語曰「楚雖三戶，亡秦必楚(9)」。自顓頊至負芻六十四世，凡千六百一十六載。

〔注〕

(1) 『史記』楚世家「楚之先祖出自帝顓頊高陽。高陽者黃帝之孫，昌意之子也。：陸終生子六人，坼剖而產焉。：六曰季連，芈姓，楚其後也。」

(2) 『水經注』洧水「世本曰『陸終娶于鬼方氏之妹，謂之女媿，是生六子。孕三年，啓其左脅，三人出焉，破其右脅，三人出焉。』」

(3) 楚世家「周文王之時，季連之苗裔曰鬻熊。鬻熊子事文王，蚤卒。其子曰熊麗。熊麗生熊狂，熊狂生熊繹。熊繹當周成王之時，舉文、武勲勞之後嗣，而封熊繹於楚蠻，封以子男之田，姓芈氏，

居丹陽。」『漢書』藝文志諸子略道家「鬻子二十二篇。名熊，爲周師，自文王以下問焉，周封爲楚祖。」『禮記』王制「天子之田方千里，公侯田方百里，伯七十里，子男五十里。不能五十里者，不合於天子，附於諸侯，曰附庸。」『春秋公羊傳』襄公十有五年「劉夏者何，天子之大夫也。劉者何，邑也。其稱劉何，以邑氏也。」何休注「諸侯入爲天子大夫，不得氏，國稱本爵，故以所受采邑氏稱子。所謂采者，不得有其土地人民，采取其租稅爾。」

(4) 楚世家「蚡冒弟熊通弑蚡冒子而代立，是爲楚武王。……二十九年，魯弑其君隱公。……三十五年，楚伐隨。隨曰『我無罪。』楚曰『我蠻夷也。今諸侯皆爲叛相侵，或相殺。我有敝甲，欲以觀中國之政，請王室尊吾號。』隨人爲之周，請尊楚，王室不聽，還報楚。三十七年，楚熊通怒曰『吾先鬻熊，文王之師也，蚤終。成王舉我先公，乃以子男田令居楚，蠻夷皆率服，而王不加位，我自尊耳。』乃自立，爲武王，與隨人盟而去。」吳樹平は『史記』に拠れば、熊繹から熊通までは十世より多い。ここで『十世稱王』というのは別に拠るところがあるだろう」という。しかし「世」を君数ではなく、兄弟で継承した場合を一世代と考えれば『史記』に拠っても十世代になる。

(5) 『史記』屈原賈生列傳「屈原者名平，楚之同姓也。爲楚懷王左徒。……王甚任之。上官大夫與之同列，爭寵而心害其能。……因讒之。……王怒而疏屈平。屈平疾王聽之不聰也，讒諂之蔽明也，邪曲之害公也，方正之不容也，故憂愁幽思而作離騷。」

(6) 屈原賈生列傳「時秦昭王與楚婚，欲與懷王會。懷王欲行，屈平曰『秦虎狼之國，不可信，不如毋行。』懷王稚子子蘭勸王行，『奈何絕秦歡。』懷王卒行。入武關，秦伏兵絕其後，因留懷王，

以求割地。懷王怒，不聽。亡走趙，趙不內。復之秦，遂死於秦而歸葬。」楚世家によれば懷王が秦に行くのを止めたのは昭雎である。

(7) 屈原賈生列傳「懷王以不知忠臣之分，故內惑於鄭袖，外欺於張儀，疏屈平而信上官大夫、令尹子蘭。兵挫地削，亡其六郡，身客死於秦，爲天下笑。……屈原至於江濱，被髮行吟澤畔。……於是懷石遂自投汨羅以死。」

(8) 楚世家「王負芻元年，燕太子丹使荊軻刺秦王。二年，秦使將軍伐楚，大破楚軍，亡十餘城。三年，秦滅魏。……五年，秦將王翦、蒙武遂破楚國，虜楚王負芻，滅楚，爲郡云。」

(9) 『史記』項羽本紀「居鄆人范增，年七十，素居家，好奇計，往說項梁曰『陳勝敗固當。夫秦滅六國，楚最無罪。自懷王入秦不反，楚人憐之至今，故楚南公曰『楚雖三戶，亡秦必楚』也。』」

〔訳〕

楚の祖先は帝顓頊から出ている。その苗裔の陸終は鬼方氏の妹女潰を娶った。彼女は妊娠して三年経っても出産せず、左脇を開くと三人の子が、右脇を開くと三人の子が出てきた。その第六子を季連といい半を姓とした。その子孫に鬻熊がおり、その子は周文王の師となった。成王が文王武王の時代に仕えて勤勞したものの子孫を取り立てた際、熊繹を楚に封じ、子・男の諸侯と同等の食地を与えた。その十世代後の熊通は自ら王と称した。懷王の佞臣上官大夫は忠臣屈原を讒言し王から遠ざけさせ、王の稚子子蘭は屈原の諫言を退けて都から放逐した。屈原は「離騷」の賦を作って、自ら汨羅の水に身を投げた。懷王は張儀に欺かれ、

秦に囚われて客死した。その後王負芻に到つて秦に滅ぼされた。その民は懷王を哀れんで「楚が最後三戸になつたとしても、秦を滅ぼすのは楚だ」と語りあつた。顓頊から負芻まで六十四世、凡そ一千六百十六年続いた。

〈燕〉

燕召公奭與周同姓(1)、武王滅紂、封召公於燕。成王時入據三公、出爲二伯、自陝以西、召公主之(2)。當農桑之時、重爲所煩勞(3)、不舍鄉亭、止于棠樹之下、聽訟決獄、百姓各得其所。壽百九十餘乃卒(4)。後人思其德美、愛其樹而不敢伐、詩甘棠之所作也(5)。九世稱侯(6)、八世稱公(7)、十世稱王(8)、到王喜爲秦所滅(9)。燕外迫蠻、貂(10)、内笮齊、晉(11)、崎嶇疆國之間、最爲弱小、幾滅者數矣。然社稷血食者八九百載(12)、於姬姓獨後亡、非盛德之遺烈、豈其然乎。

〔注〕

(1) 『史記』燕召公世家「召公奭與周同姓、姓姬氏。周武王之滅紂、封召公於北燕。其在成王時、召公爲三公、自陝以西、召公主之、自陝以東、周公主之。：：召公之治西方、甚得兆民和。召公巡行鄉邑、有棠樹、決獄政事其下、自侯伯至庶人各得其所、無失職者。召公卒、而民人思召公之政、懷棠樹不敢伐、哥詠之、作甘棠之詩。」

(2) 『春秋公羊傳』隱公五年「諸公者何、諸侯者何。天子三公稱公、王者之後稱公、其餘大國稱侯、小國稱伯子男。天子三公者何。天子之相也。天子之相、則何以三。自陝而東者、周公主之。自陝

而西者、召公主之。一相處乎内。」何休注「陝者蓋今弘農陝縣是也。」『白虎通義』封公侯「王者受命爲天地人之職、故分職以置三公、各主其一、以効其功。：：王者所以有二伯者、分職而授政、欲其亟成也。王制曰『八伯各以其屬屬於天子之老二人、分天下以爲左右、曰二伯。』」

(3) 吳樹平、王利器ともに盧文弨『拾補』の「所字衍」を引く。これに従う。

(4) 『論衡』氣壽篇「文王九十七而薨、武王九十三而崩。周公、武王之弟也。兄弟相差、不過十年。武王崩、周公居攝七年、復政退老、出入百歲矣。邵公、周公之兄也。至康王之時、尚爲太保、出入百有餘歲矣。：：傳稱、老子二百餘歲、邵公百八十。」

(5) 『詩經』召南甘棠「蔽芾甘棠、勿剪勿伐、召伯所芘。」毛傳「蔽芾、小貌。甘棠、杜也。翦、去、伐、擊也。」鄭箋「芘、草舍也。召伯聽男女之訟、不重煩勞百姓、止舍小棠之下、而聽斷焉。國人被其德、說其化、思其人、敬其樹。」「甘棠」は和名ヤマナシ。カタナシ、コリンゴともいう。

(6) 燕召公世家「自召公已下九世至惠侯。燕惠侯當周厲王奔虜、共和之時。」

(7) 燕召公世家「莊公十二年、齊桓公始霸。：：二十七年、山戎來侵我、齊桓公救燕、遂北伐山戎而還。燕君送齊桓公出境、桓公因割燕所至地予燕、使燕共貢天子、如成周時職、使燕復修召公之法。」

(8) 燕召公世家「易王初立、齊宣王因燕喪伐我、取十城。蘇秦說齊、使復歸燕十城。十年、燕君爲王。」吳樹平は『史記』に拠れば莊公から易王まで二十世ある。ここで『十世稱王』というの

は誤記であろう」という。王利器に注無し。

(9) 燕召公世家「燕見秦且滅六國，秦兵臨易水，禍且至燕。太子丹陰養壯士二十人，使荊軻獻督亢地圖於秦，因襲刺秦王。秦王覺，殺軻，使將軍王翦擊燕。二十九年，秦攻拔我薊，燕王亡，徙居遼東，斬丹以獻秦。三十年，秦滅魏。三十三年，秦拔遼東，虜燕王喜，卒滅燕。」

(10) 燕召公世家「太史公曰召公奭可謂仁矣。甘棠且思之，況其人乎。燕外迫蠻、貉，內措齊、晉，崎嶇疆國之間，最爲弱小，幾滅者數矣。然社稷血食者八九百歲，於姬姓獨後亡，豈非召公之烈邪。」

(11) 『說文解字』「笮，迫也。」

(12) 『漢書』高帝紀下「故粵王亡諸世奉粵祀，秦侵奪其地，使其社稷不得血食。」師古曰「祭者尚血腥，故曰血食也。」

〔記〕

燕の召公奭は周と同姓の姫氏である。周武王が殷紂王を滅ぼした後、召公を燕に封じた。成王の時召公は朝廷にあつては三公として仕え、朝廷の外では周公と共に二伯として、陝より以西の諸侯を召公が（陝以東は周公が）束ねた。農業や養蚕の繁忙期には人民を煩わせないよう巡行地の官舎に宿泊せず、甘棠（ヤマナシ）の樹の下に泊まり、訴訟事を聞き的確に裁断したので人民はみな満足した。百九十歳を超える長寿で死去した後、人びとはその厚徳を慕い、その樹を愛して伐採しようとせず、「甘棠」の詩を作った。召公の九世の子孫恵侯から「侯」を称し、その八世後莊公から「公」に戻し、さらに十世後易王が「王」と称した。

王喜に到つて秦に滅ぼされた。燕は中国の外からは蛮・貉といった異民族に迫られ、中国内では斉・晋に圧され、強国に挟まれて苦しみ、諸侯の中でも最弱で、何度も滅びかけた。それでも社稷を八、九百年の間保ち供物を捧げ続け、姫姓の諸侯の中で最後まで残つたのは、始祖召公の盛徳の遺烈のお陰であつただろう。

〈韓〉

韓之先與周同姓(1)，武子事晉獻公，封於韓原，因以爲姓。韓厥因卜者之繇(2)，陳成季之功(3)，紹趙氏之孤，建程嬰之義(4)，爲晉名卿(5)，實天所相。其四代始與趙、魏俱得列爲諸侯矣(6)。五世稱王(7)，到王安爲秦所滅(8)。

〔注〕

(1) 『史記』韓世家「韓之先與周同姓，姓姫氏。其後苗裔事晉，得封於韓原，曰韓武子。武子後三世有韓厥，從封姓爲韓氏。」

(2) 韓世家「韓厥，晉景公之三年，晉司寇屠岸賈將作亂，誅靈公之賊趙盾。趙盾已死矣，欲誅其子趙朔。韓厥止賈，賈不聽。厥告趙朔令亡。朔曰『子必能不絕趙祀，死不恨矣。』韓厥許之。及賈誅趙氏，厥稱疾不出。程嬰、公孫杵臼之藏趙孤趙武也，厥知之。景公十一年，厥與郤克將兵八百乘伐齊，敗齊頃公于鞍，獲逢丑父。於是晉作六卿，而韓厥在一卿之位，號獻子。晉景公十七年，病，卜，大業之不遂者爲祟。韓厥稱趙成季之功，今後無祀，以感景公。景公問曰『尚有世乎。』厥於是言趙武，而復與故趙氏田邑，續趙氏祀。」注(4)参照。『春秋左氏傳』閔公二年「成風聞成季之繇，

乃事之，而屬僖公焉。故成季立之。」杜預注「成風，莊公之妾，僖公之母也。繇，卦兆之古辭。」釋文「繇，直救反。」この「成季」は魯桓公の子で、本文中の「成季」とは別人。

(3) 「成季」は趙衰の諡。『史記』趙世家「趙衰卜事晉獻公及諸公子，莫吉。卜事公子重耳，吉，即事重耳。重耳以驪姬之亂亡奔翟，趙衰從。……趙衰從重耳出亡，凡十九年，得反國。重耳，爲晉文公，趙衰爲原大夫，居原，任國政。文公所以反國及霸，多趙衰計策。……晉襄公之六年，而趙衰卒，諡爲成季。趙盾代成季任國政。」

(4) 所謂「趙氏孤兒」の故事。趙世家に詳しい。晉襄公の死後、太子の夷皋が年少だったので、趙盾は襄公の弟を立てようとしたが、太子の母に泣きつかれ仕方なく太子を立てた。これが靈公である。即位後十四年、靈公は驕慢な振る舞いが多く、趙盾が諫めでも聴かなかった。ある日靈公は調理に難癖をつけて宰人（料理人）を殺し、死体を宮外に持ち出そうとしたが、趙盾に見られてしまった。懼れた靈公は趙盾を殺そうとした。趙盾は逃亡したが、国境を出ないうちに異母弟の趙穿が靈公を弑し、襄公の弟を周から迎えて成公とした。（趙）項二段目注（11）参照。趙盾はもとり国政を任された。成公の子景公の時趙盾が死に、趙朔が後を嗣いだ。景公三年、靈公の寵臣であった大夫屠岸賈は、趙盾が靈公を弑した首謀者であるとして趙氏を誅滅しよう進言した。韓厥は趙盾の無罪を説き反対したが、屠岸賈は聞きいれない。韓厥は趙朔に逃亡を勧めたが、趙朔は「趙の祀を絶やさないうようにしてくれば死んでも恨みはない」という。韓厥は許諾し、病気を理由に家に閉じこもった。屠岸賈は諸將とともに下宮に趙氏を攻め、趙朔らを族滅した。趙朔の妻は成公の姉で遺腹があり、公宮に逃

げて隠れ、男児を産んだ。趙朔の食客公孫杵臼と趙朔の友人程嬰は策謀し、他人の嬰兒を取って山中に逃げた。その後程嬰は山を下り、諸將に「千金をくれるなら趙氏孤兒の居所を教えよう」と偽って言った。程嬰が諸將をつれて杵臼を攻めると、杵臼は程嬰の裏切りを罵り、子どもだけは助けってくれと懇願するも、二人は殺され、諸將は趙氏孤兒が死んだと思い込んだ。程嬰は真の孤兒と山中に匿れた。十五年後、晉景公が病み、占うと大功のあるのに子孫が絶え祀りを受けられない者が祟りをなしているという結果が出た。韓厥は趙氏の孤兒が生存しているのを知っていたので、これに趙氏を嗣がせるよう進言した。景公は孤兒趙武と程嬰を召し出し、趙氏の田邑と祭祀を復活させた。趙武が成人すると程嬰は趙武に「趙朔と杵臼に事の次第を報告する」と告げ自殺する。趙武は程嬰のために三年服喪し、春秋の祭りを営み代々絶やさなかった。『春秋左氏傳』成公八年の記述はこれと異なる。趙莊姬（趙朔の妻、成公の娘）は愛人の趙嬰（趙朔の叔父）が趙氏に国外追放されたことを恨み、景公に趙氏が乱を企てていると讒言した。晋は趙氏一族を誅滅したが、趙朔の遺児趙武だけ母親に従い公宮内で養育された。趙氏の田領は他氏に与えられることになったが、韓厥の取りなしで趙武に返され、趙氏が復興した。韓世家「太史公曰韓厥之感晉景公，紹趙孤之子武，以成程嬰、公孫杵臼之義，此天下之陰德也。韓氏之功，於晉未睹其大者也。然與趙、魏終爲諸侯十餘世，宜乎哉。」

(5) 韓世家「景公十一年，厥與卻克將兵八百乘伐齊，敗齊頃公于鞍，獲逢丑父。於是晉作六卿，而韓厥在一卿之位，號爲獻子。」

(6) 韓世家「晉悼公之七年，韓獻子老。獻子卒，子宣子代。」以

降「貞子」「簡子」「莊子」「康子」と続き、「康子與趙襄子、魏桓子共敗知伯，分其地，地益大，大於諸侯。康子卒，子武子代。武子二年，伐鄭，殺其君幽公。十六年，武子卒，子景侯立。景侯虔元年，伐鄭，取雍丘。二年，鄭敗我負黍。六年，與趙、魏俱得列爲諸侯。」

(7) 「景侯」の後は「列侯」「文侯」「哀侯」「懿侯」「昭侯」と続き、韓世家「(昭侯)二十六年，高門成，昭侯卒，果不出此門。子宣惠王立。宣惠王：十一年，君號爲王。」

(8) 韓世家「王安五年，秦攻韓，韓急，使韓非使秦，秦留非，因殺之。九年，秦虜王安，盡入其地，爲潁川郡。韓遂亡。」

〔訳〕

韓の祖先は周と同じ姫姓である。その苗裔の武子が晋獻公に仕え、韓原に封じられたので韓を姓とした。晋景公が重病にかかり、その原因を龜卜したところ、功績があるのに家が絶えて祀られないものの祟りであるとの占辞がでた。韓厥は、それは趙氏のことであるといひ、重耳（後の文公）の諸国放浪に従ひ、文公の霸業に貢献した趙衰（諡成季）の功績を述べた。そして靈公を弑した首謀者一族として族滅された趙朔の孤児の生存を明らかにして趙氏の復活を助け、命を懸けて孤児を守った（公孫杵臼と）程嬰の趙朔に対する義を立ててやった。韓厥は晋の六卿の第一位となったが、それはこの行為に感じた天の助けによるものであろう。韓厥の四代後景侯が趙・魏とともに諸侯の列に並んだ。その五世後宣惠王が王と称し、王安に到って秦に滅ぼされた。

〔魏〕

魏之先畢公高之後也(1)。畢公與周同姓，武王滅紂，封高於畢(2)，因以爲姓。其裔孫曰畢萬，事晉獻公。獻公伐魏，滅之，以封萬(3)。卜偃(4)曰「畢萬之後必大。萬，盈數，魏，大名也(5)。天子曰兆民，諸侯曰萬民。今名之大，以從盈數，以是有衆，不亦宜乎。」其六世稱侯(6)，侯之孫稱王(7)，到王假爲秦所滅(8)。

〔注〕

(1) 『史記』魏世家「魏之先畢公高之後也。畢公高與周同姓。武王之伐紂，而高封於畢，於是爲畢姓。其後絶封，爲庶人。或在中國，或在夷狄。其苗裔曰畢萬，事晉獻公。」集解「杜預曰『畢在長安縣西北。』正義「括地志云『畢原，在雍州萬年縣西南二十八里。』」

(2) 『史記』周本紀「武王即位，太公望爲師，周公旦爲輔，召公、畢公之徒左右王師，脩文王緒業。」

(3) 魏世家「獻公之十六年，趙夙爲御，畢萬爲右，以伐霍、耿、魏，滅之。以耿封趙夙，以魏封畢萬，爲大夫。」『春秋左氏傳』閔公元年「晉侯作二軍，公將上軍，大子申生將下軍。趙夙御戎，畢萬爲右。以滅耿滅霍滅魏。還爲大子城曲沃，賜趙夙耿，賜畢萬魏，以爲大夫。」杜注「爲公御右也。夙，趙衰兄，畢萬，魏嬖祖父。平陽皮氏縣東南有耿鄉，永安縣東北有霍大山。三國皆姬姓。」(4) 魏世家「卜偃曰『畢萬之後必大矣。萬，滿數也，魏，大名也。以是始賞，天開之矣。天子曰兆民，諸侯曰萬民。今命之大，以從滿數，其必有衆。』」『春秋左氏傳』閔公元年「卜偃曰『畢萬

之後必大。萬，盈數，魏，大名也。以是始賞，天啓之矣。天子曰兆民，諸侯曰萬民。今名之大，以從盈數，其必有衆。』杜注「卜偃，晉掌卜大夫。以魏從萬，有衆象。」

(5) 『論語』泰伯「子曰『大哉，堯之君也，巍巍乎。唯天爲大，唯堯則之。蕩蕩乎，民無能名焉。巍巍乎，其有成功也。煥乎，其有文章。』」

(6) 魏世家「魏文侯元年，秦靈公之元年也。與韓武子、趙桓子、周威王同時。：二十二年，魏、趙、韓列爲諸侯。」畢万の子魏武子から文侯まで十世を数える。

(7) 魏世家「三十八年，：是歲，文侯卒，子擊立，是爲武侯。：十一年，與韓、趙三分晉地，滅其後。：十六年，：武侯卒，子瑩立，是爲惠王。：三十六年，：是歲，惠王卒，子襄王立。襄王元年，與諸侯會徐州，相王也。追尊父惠王爲王。」

(8) 魏世家「王假元年，燕太子丹使荊軻刺秦王，秦王覺之。三年，秦灌大梁，虜王假，遂滅魏以爲郡縣。」

〔記〕

魏の祖先は畢公高の後裔である。畢公は周と同じ姫姓で、武王が紂王を滅ぼした後、高を畢に封じたので、それによつて畢を姓とした。その後裔の畢万は晋献公に仕えた。献公が魏を伐ち、滅ぼすと、万を魏に封じた。卜偃（晋の占卜官、大夫）は云った、「畢万の子孫は必ず強大となるだろう。万は盈数（満ちた数）であり、魏は大を表す言葉である。天子の衆は兆民、諸侯の衆は万民という。今大を表す魏を盈数である万に与えるのであるから、諸侯となつて万民の衆を得るのは当然だろう。」畢万の六世後文侯の時、

諸侯となつて侯を称し、文侯の孫惠王は死後王号を追贈された。王假に到つて秦に滅ぼされた。

〈趙〉

趙之先與秦同祖(1)，其裔孫曰造父(2)，於周穆王爲御驂騮、騶耳之乘(3)，西謁西王母(4)，東滅徐偃王，日馳千里(5)，帝念其功，賜以趙城，因以爲姓。子叔帶始去周事晉(6)。

〔注〕

(1) 『史記』趙世家「趙氏之先與秦共祖。至中衍，爲帝大戊御。其後世蜚廉有子二人，而命其一子曰惡來，事紂，爲周所殺，其後爲秦。惡來弟曰季勝，其後爲趙。」

(2) 趙世家「季勝生孟增。孟增幸於周成王，是爲宅皋狼。皋狼生衡父，衡父生造父。」

(3) 趙世家「造父幸於周繆王。造父取驥之乘匹，與桃林盜驥、驂騮、騶耳，獻之繆王。繆王使造父御，西巡狩，見西王母，樂之忘歸。而徐偃王反，繆王日馳千里馬，攻徐偃王，大破之。乃賜造父以趙城，由此爲趙氏。」索隱「言造父取八駿，品其色，齊其力，使馴調也。並四日乘，並兩日匹。」『穆天子傳』「天子之駿，赤驥、盜驥、：華驥、綠耳。：天子之御，造父、三百、耿儵、芍及。」

(4) 『穆天子傳』「吉日甲子，天子賓于西王母。：乙丑，天子觴西王母于瑤池之上，西王母爲天子謠。」

(5) 『博物志』「徐偃王志云『徐君宮人娠而生卵，以爲不祥，棄之水濱。獨孤母有大名鵠蒼。獵於水濱，得所棄卵，銜以東歸。獨孤母以爲異，覆煖之，遂沸成兒，生時正偃，故以爲名。徐君宮中聞

之，乃更錄取。長而仁智，襲君徐國。：偃王既主其國，仁義著聞。欲舟行上國，乃通溝陳蔡之間，得朱弓矢。以己得天瑞，遂因名爲弓，自稱徐偃王。江淮諸侯皆服從偃，從者三十六國。周王聞之，遣使乘驛，一日至楚，使伐之。偃王仁不忍鬪害其民，爲楚所敗，逃走彭城武原縣東山下。百姓隨之者以萬數。後遂名其山爲徐山，山上立石室。有神靈，民人祈禱。今皆見存。『後漢書』東夷列傳「後徐夷僭號，乃率九夷以伐宗周，西至河上。穆王畏其方熾，乃分東方諸侯，命徐偃王主之。偃王處潢池東，地方五百里，行仁義，陸地而朝者三十有六國。穆王後得驥騾之乘，乃使造父御以告楚，令伐徐，一日而至。於是楚文王大舉兵而滅之。偃王仁而無權，不忍鬪其人，故致於敗。乃北走彭城武原縣東山下，百姓隨之者以萬數。因名其山爲徐山。」

(6) 趙世家「自造父已下六世至奄父，曰公仲，周宣王時伐戎，爲御。及千畝戰，奄父脫宣王。奄父生叔帶。叔帶之時，周幽王無道，去周如晉，事晉文侯，始建趙氏于晉國。」

〔記〕

趙の祖先は秦と同祖で、その子孫を造父という。周の穆王に仕え馭者となった。穆王は彼が御す驥騾、緑耳という名馬がひく四頭立ての馬車に乗り、西のかた西王母に拝謁した。その時東のかた徐偃王が叛乱を起こすと、討伐に赴く穆王の馬車を一日千里奔らせた。穆王は彼の功績を念慮し趙城を賜った。造父はそれに因んで趙を姓とした。子孫の叔帯のときに周を去って始めて晋に事えた。

其後簡子地過於諸侯，權重於晉君(1)。簡子疾(2)，五

日不知人。大夫皆懼，呼豎扁鵲視之(3)。出董安于問(4)。扁鵲曰「血脈治也，勿怪。昔秦穆公嘗如此(5)，七日而寤。寤之日，告公孫支與子輿(6)曰『我之帝所，甚樂。吾所以久者，適有學也。帝告我『晉國且大亂，五世不安。其後將霸，未老而死。霸者之子且令國男女無別。』』公孫支書而藏之，秦策於是出(7)。夫獻公之亂(8)，文公之霸(9)，而襄公之敗秦師於殺(10)而歸縱淫(11)，此子所聞。今主君之病與之同，不出三日，病必間，間必有言也。」

居二日半，簡子寤。語大夫曰「我之帝所，樂，與百神游於鈞天(12)，廣樂九奏萬舞(13)，不類三代之樂，其聲動心。有一熊欲援我，射之(14)，中熊死。有羆來，我又射之，中羆死。帝甚嘉之，賜我二笥，皆有副(15)。吾見兒在帝側，帝屬我翟犬(16)曰『及汝子之壯也，以賜之。』帝告我『晉國且衰，十世而亡，羆姓將大敗周人於范魁之西，亦不能有也(17)。』董安于受言而藏之。以扁鵲之言告簡子，賜扁鵲田四萬畝。

他日，簡子出，有人當道，辟之不去，從者將刃。當道者曰「吾欲有謁於主君。」從者以聞。簡子召之，曰「嘻，吾有所見子晰也(18)。」當道者曰「屏左右，願有以謁。」簡子屏人。當道者曰「主君之病，臣在帝側。」簡子曰「然。簡子之見我何爲。」當道者曰「帝令主君射熊羆，皆死。」簡子曰「是且何也。」當道者曰「晉國且大難，主君首之。帝令主君滅二卿，夫熊羆皆其祖也(19)。」簡子曰「帝賜我二笥皆有副(20)，何也。」當道者曰「主君之子將剋二國於翟，皆子姓也(21)。」簡子曰「吾見兒在帝側，屬我一翟犬(22)，

曰『及汝子之長以賜之』。夫兒何說以賜翟犬。」當道者曰「兒，主君之子也。翟犬，代之先也。主君之子其必有代。及主君之後嗣，且有革政而胡服(23)，並二國於翟(24)。」簡子問其姓而延之以官。當道者曰「臣野人，致帝命耳。」遂不見。無幾，范、中行作亂，簡子滅之(25)，此熊羆之効應也。

〔注〕

(1) 趙簡子(趙鞅)は趙武の孫。趙武は所謂「趙氏孤兒」。(韓)項參照。趙世家「趙簡子在位，晉頃公之九年，簡子將合諸侯成于周。其明年，入周敬王于周，辟弟子朝之故也。晉頃公之十二年，六卿以法誅公族祁氏、羊舌氏，分其邑爲十縣，六卿各令其族爲之大夫。晉公室由此益弱。：晉定公二十一年，簡子拔邯鄲，中行文子奔柏人。簡子又圍柏人，中行文子、范昭子遂奔齊。趙竟有邯鄲、柏人。范、中行餘邑入于晉。趙名晉卿，實專晉權，奉邑侔於諸侯。」

(2) 「簡子疾」から「當道者曰臣野人，致帝命耳。遂不見」までほぼ趙世家に同じ。この話は『論衡』紀妖篇にも見える。

(3) 『史記』扁鵲倉公列傳「扁鵲者，渤海郡鄭人也，姓秦氏，名越人。：長桑君亦知扁鵲非常人也。出入十餘年，乃呼扁鵲私坐，：乃出其懷中藥予扁鵲，『飲是以上池之水，三十日當知物矣。』乃悉取其禁方書盡與扁鵲。忽然不見，殆非人也。扁鵲以其言飲藥三十日，視見垣一方人。以此視病，盡見五臟癥結，特以診脈爲名耳。爲醫或在齊，或在趙。在趙者名扁鵲。」趙簡子の病の話は扁鵲列伝にも見える。

(4) 趙世家集解「韋昭曰『安于，簡子家臣。』」

(5) 『史記』封禪書「秦繆公立，病臥五日不寤。寤，乃言夢見上帝，上帝命繆公平晉亂。史書而記載之。而後世皆曰秦繆公上天。秦繆公即位九年，：是歲，秦繆公內晉君夷吾。其後三置晉國之君，平其亂，繆公立三十九年而卒。」索隱「三置晉君。案謂惠公、懷公、文公也。」

(6) 『史記』李斯列傳「斯乃上書曰『：昔繆公求士，西取由余於戎，東得百里奚於宛，迎蹇叔於宋，來丕豹、公孫支於晉。此五子者，不產於秦，而繆公用之，并國二十，遂霸西戎。』」索隱「丕豹自晉奔秦，左氏傳有明文。公孫支，所謂子桑也。是秦大夫，而云自晉來，亦未見所出。」正義「括地志云『公孫支，岐州人，游晉，後歸秦。』」『莊子』大宗師「子輿與子桑友。而霖雨十日。子輿曰『子桑殆病矣。』裹飯而往食之。至子桑之門，則若歌若哭，鼓琴曰『父邪，母邪，天乎，人乎。』」

(7) 趙世家、「策」を「讖」に作る。

(8) 『史記』秦本紀「(繆公)五年，：秋，繆公自將伐晉，戰於河曲。晉驪姬作亂，太子申生死新城，重耳、夷吾出奔。」

(9) 秦本紀「(繆公)二十三年，晉惠公卒，子圉立爲君。秦怨圍亡去，乃迎晉公子重耳於楚，而妻以故子圉妻。重耳初謝，後乃受。繆公益禮厚遇之。二十四年春，秦使人告晉大臣，欲入重耳。晉許之，於是使人送重耳。二月，重耳立爲晉君，是爲文公。」文公の霸業については前條「五伯」に詳しく載せる。

(10) 晋襄公(文公の子)が秦を殺で破ったことは、前條「五伯」に見える。「謹按」注(15)参照。

(11) 『史記』晋世家「十四年，靈侯壯，侈，厚斂以彫牆。從臺上彈人，觀其避丸也。宰夫胹熊蹯不熟，靈公怒，殺宰夫，使婦人持

其屍出弃之，過朝。趙盾、隨會前數諫，不聽。已又見死人手，二人前諫。隨會先諫，不聽。靈公患之，使鉅麇刺趙盾。……盾遂奔，未出晉境。乙丑，盾昆弟將軍趙穿襲殺靈公於桃園，而迎趙盾。趙盾素貴，得民和。靈公少，侈，民不附，故爲弑易。」（韓）項注（4）参照。

（12）『呂氏春秋』有始「天有九野，地有九州，……何謂九野。中央曰鈞天，其星角、亢、氐。」高誘注「鈞，平也。爲四方主，故曰鈞天。」

（13）『穆天子傳』「天子乃奏廣樂。」『尚書』益稷「簫韶九成，鳳皇來儀。」孔傳「備樂九奏，而致鳳皇，則餘鳥獸不待九而率舞。」

（14）趙世家、『論衡』この二字の上に「帝命我」がある。吳樹平、王利器ともに補うべきという。これに従う。

（15）王利器は「副」について「謂箇中之策，皆有副貳之本也」といい、『漢書』高惠高后文功臣表を引く。「高后二年，復詔丞相陳平盡差列侯之功，錄弟下竟，臧諸宗廟，副在有司。」師古曰「副，貳也。其列侯功籍已藏於宗廟，副貳之本又在有司。」吳樹平に注なし。「副」は副本、控えを指すか。

（16）「帝」字原無し。吳樹平、王利器とも『史記』等により補う。

（17）趙世家「帝告我，『晉國且世衰，七世而亡。嬴姓將大敗周人於范魁之西，而亦不能有也。今余思虞舜之勳，適余將以其胄女孟姚配而七世之孫。』」正義「謂晉定公、出公、哀公、幽公、烈公、孝公、靜公爲七世。靜公二年，爲三晉所滅。據此及年表，簡子疾在定公十一年。」索隱「范魁，地名，不知所在，蓋趙地。」正義「嬴，趙姓也。周人，謂衛也。晉亡之後，趙成侯三年伐衛，取都鄙七十三，是也。賈逵云『小阜曰魁』也。」

（18）趙世家索隱「簡子見當道者，乃寤曰『諱，是吾前夢所見，知其名曰子晰者。』」吳樹平、王利器ともに「晰」は「當道者」の名ではなく、「明晰」の意とする。これに従う。

（19）趙世家正義「范氏、中行氏之祖也。」

（20）趙世家正義「副謂皆子姓也。」「子」は「父」の「副」の意か。

（21）趙世家正義「謂代及智氏也。」王利器は下文に拠って、范氏と中行氏をさすという。吳樹平は正義に従う。

（22）趙世家、『論衡』「屬」の上に「帝」がある。

（23）趙世家正義「今時服也，廢除裘裳也。」

（24）趙世家正義「武靈王略中山地，至寧葭，西略胡地至樓煩、榆中，是也。」

（25）范氏、中行氏はともに晋の六卿。晋世家「（定公）十五年，趙鞅使邯鄲大夫午，不信，欲殺午。午與中行寅、范吉射親，攻趙鞅，鞅走保晉陽。定公圍晉陽。荀栎、韓不信、魏侈與范、中行爲仇，乃移兵伐范、中行。范、中行反，晉君擊之，敗范、中行。范、中行走朝歌，保之。韓、魏爲趙鞅謝晉君，乃赦趙鞅，復位。二十二年，晉敗范、中行氏，二子奔齊。」趙世家「晉定公十八年，趙簡子圍范、中行于朝歌，中行文子奔邯鄲。……晉定公二十一年，簡子拔邯鄲，中行文子奔柏人。簡子又圍柏人，中行文子、范昭子遂奔齊。趙竟有邯鄲、柏人。范、中行餘邑入于晉。趙名晉卿，實專晉權，奉邑侔於諸侯。」

〔訳〕

その後趙簡子（趙鞅）の土地は諸侯を超え、権力は晋君より強大になった。あるとき趙簡子が病気になり五日間意

識不明になった。家臣の大夫たちはみな懼れ、名医扁鵲を呼んで診察させた。診察後病室から出てきた扁鵲に、大夫の董安于が病状を問うと、扁鵲は答えた。「血脈が落ち着いているので心配には及びません。昔秦の穆公も同様なことがあり、七日後に目覚めました。目覚めた日、家臣の公孫支と子輿にこう告げました。『私は天帝の所へ行きとても楽しんだ。長居したのは学ぶことがあったからだ。天帝は私に、「晋国はじきに大乱が起こり、五世代にわたって不安定になる。その後覇者になるが、覇者は年老いないうちに死ぬ。その息子は国内の男女の別を乱すだろう」と告げたのだ。』公孫支はこれを書いて保管しました。秦の預言書はこれに始まります。晋の献公時代の驪姫が原因の乱、文公が覇者となったこと、文公の子襄公が秦軍を殺で破つたこと、しかし襄公の子靈公が奢侈に耽り、自分の身勝手に料理人を殺し、死体を宮女に棄てさせ、それがもとで趙穿に弑されたこと、これらの事はあなたも聞いているだろう。今主君の病は穆公と同じで、三日以内に必ず癒え、癒えればきつとお話しになるでしょう。」

二日と半日すると趙簡子は目覚め、大夫たちに語った。「私は天帝の所へゆき、そこで楽しんだ。百神と天の中央である鈞天に遊んだのだ。九曲から成る組曲が盛大に演奏され、それに合わせて一万もの天人が舞った。それは夏殷周三代の楽にも似ておらず、その楽声に心が動かされた。一頭の熊が私に掴みかかってきた。天帝が私に射るようお命じになり、射ると熊に命中して死んだ。つぎに罫がやつ

てきたので、又射ると今度も命中した。天帝はたいそう褒めて下さり、私に竹製の文書箱を二つ賜った。どちらも副本が添えられていた。天帝の側に子どもがいた。天帝は私に翟の犬を託し、『汝の息子が成人したらこれを与えよ』と言い、『晋国はもうすぐ衰退し、十代（七代）で滅ぶだろう。嬴姓（趙）が周人（衛）を范魁の西で大いに破るが、やはり保つことはできないだろう』と告げられた。「董安于はこの言葉を書き取り保管した。そして扁鵲の言ったことを簡子に告げた。簡子は扁鵲に四万畝の田を賜った。」

後日、簡子が外出すると道を遮るひとがいた。道をあけさせようとしたが去らないので従者が斬ろうとした。その人が「私はご主君にお目にかかりたいのだ」というので、従者は報告した。簡子はその人を召すと「ああ、私は確かにあなたに会ったことがある」と言った。その人が「おそばの者を退けて下さい。申し上げたいことがございます」といので、簡子は人払いをした。その人は言った、「主君が病気になるるとき、私は天帝の側におりました。」簡子は「そのとおりで。あなたは私に何用があるのかな」という。「天帝は主君に熊と罫を射殺させました。」「それはどういふことなのかね。」「晋国はもうすぐ大難に見舞われ、主君がその発端となります。天帝は主君に二卿（范氏と中行氏）を滅ぼさせます。熊と罫はその二卿の祖先なのです。」「天帝は私に二つの竹の文書箱を下さり、どちらにも副本がついていた、それは何かね。」「主君のお子は二国（代国と智氏）に翟の地で勝利するでしょう。二国とも子

姓です。(父の「副」は子です。」「天帝の側に子どもがいた。天帝は私に翟の犬を一頭賜り、『汝の子が成長したらこれを与えよ』と仰せになりました。あのこどもは何者か、翟の犬を与えるとは何のことか。」「あのこどもは主君のお子です。翟の犬とは代の祖先です。主君のお子は必ず代を手に入れます。そして主君の子孫の時代に、政事を改革して胡服(遊牧民の服)を着、二国を翟の地に併合するでしょう。」「簡子は彼の姓を聞き、招いて官に任用しようとしたが、「臣は野人で、天帝の命を伝えるに参っただけです」といつて消えた。この後まもなく范氏と中行氏が乱を起し、簡子が二氏を滅ぼした。これがあの「熊と羆を射殺した」夢の効応である。

簡子卒，無卹立，是爲襄子(1)。智伯攻襄子(2)，襄子奔之，保晉陽。原過從，後，至王澤，見三人(3)，自帶以上可見，自帶以下不可見(4)，與原過竹二節，莫通。曰「爲我以是遺趙無恤。」原過既至，以告襄子。齋三日，親自剖竹，有朱書曰「無恤，余霍太山陽公，大吏(5)。三月丙戌，余將使汝反滅智氏。亦立我于百邑，余將使賜若林胡之地(6)。至于後世，且有仇王，赤黑，龍面鳥喙，鬚眉髭髯，大膺大匈，脩下而馮上，左任介乘(7)，奄有河宗(8)，至于休溷諸貉(9)，南伐晉別(10)，北滅黑姑(11)。」襄子再拜，受三神之令。三國攻晉陽(12)，歲餘，乃以汾水灌其城，城不沒者三板(13)。城中懸釜而炊，易子而食。張孟談乃夜出見韓、魏、韓、魏反與合謀而滅智氏，共分其地。於是趙

北有代，南並智氏。遂祀三神於百邑，使原過主霍太山。至武靈王，遂胡服騎射，辟地千里。到王遷(14)，信秦反間之言，殺其良將李牧而任趙括(15)，遂爲所滅。此童謠曰「趙爲號，秦爲笑，以爲不信，視地上生毛(16)。」

〔注〕

(1) 趙世家「晉出公十七年，簡子卒，太子毋卹代立，是爲襄子。」趙簡子は夢を見た後、姑布子卿に息子たちの人相を見させた。彼は「毋卹(無卹)だけが真の將軍だ」という。毋卹の母は賤しい婢で翟人だった。簡子は息子たちを試し、毋卹が賢であるのを知ると、太子伯魯を廢して、毋卹を太子にした。

(2) 智(知)氏は晋の六卿の一。晋出公十一年、知伯が鄭を伐つた時、病氣の簡子に代わって毋卹が鄭を困んだ。知伯は酔って毋卹を侮辱したが毋卹は耐えた。知伯はまた簡子に毋卹を太子から廢させようとしたので、毋卹は知伯を怨んでいた。趙世家「襄子立四年，知伯與趙、韓、魏盡分其范、中行故地。晋出公怒，告齊、魯，欲以伐四卿。四卿恐，遂共攻出公。出公奔齊，道死。知伯乃立昭公會孫驕，是爲晉懿公。知伯益驕。請地韓、魏、韓、魏與之。請地趙，趙不與，以其圍鄭之辱。知伯怒，遂率韓、魏攻趙。趙襄子懼，乃奔保晉陽。」この後から「使原過主霍太山」までほぼ趙世家に同じ。『論衡』紀妖篇にも見える。

(3) 『水經注』汾水(經)又南入河東界，又南過永安縣西。歷唐城東。(注)瓚注漢書云『堯所都也。』東去彘十里。汾水又南，與彘水合，水出東北太岳山，禹貢所謂岳陽也，卽霍太山矣。上有飛廉墓。：有岳廟，廟甚靈，烏雀不棲其林，猛虎常守其庭。又有靈泉，以供祭祀，鼓動則泉流，聲絕則水竭。：彘水又西流，

逕觀阜北，故百邑也。原過之從襄子也，受竹書于王澤，以告襄子。

襄子齋三日，親自剖竹，有朱書曰『余霍太山山陽侯，天使也。三

月丙戌，余將使汝反滅智氏，汝亦立我于百邑也。』襄子拜受三神之命，遂滅智氏，祠三神于百邑，使原過主之，世謂其處爲觀阜也。」

(4) 上二句もと「自帶以上不可見」に作る。吳樹平、趙世家と『論衡』により校補する。

(5) 趙世家は「余霍泰山山陽侯，天使也」に作る。

(6) 『史記』匈奴列傳「而晉北有林胡、樓煩之戎，燕北有東胡、山戎。各分散居谿谷，自有君長，往往而聚者百有餘戎，然莫能相一。」

(7) 『尚書』畢命「四夷左衽，罔不成賴。」『詩經』鄭風清人「清人在彭，駟介旁旁。」毛傳「介，甲也。」

(8) 「河宗」もと「河室」に作る。趙世家によつて改める。『尚書』大禹謨「皇天眷命，奄有四海，爲天下君。」孔傳「奄，同也。」「河宗」は黄河のこと、ここでは黄河中流一帯を指す。

(9) 趙世家正義「音陌。自河宗、休溷諸貉，乃戎狄之地也。」

(10) 趙世家正義「趙南伐晉之別邑，謂韓、魏之邑也。」

(11) 趙世家正義「亦戎國。」

(12) 趙世家「三國攻晉陽，歲餘，引汾水灌其城，城不浸者三版。城中懸釜而炊，易子而食。羣臣皆有外心，禮益慢，唯高共不敢失禮。襄子懼，乃夜使相張孟同私於韓、魏。韓、魏與合謀，以三月丙戌，三國反滅知氏，共分其地。於是襄子行賞，高共爲上。張孟同曰『晉陽之難，唯共無功。』襄子曰『方晉陽急，羣臣皆懈，惟共不敢失人臣禮，是以先之。』於是趙北有代，南并知氏，彊於韓、魏。遂祠三神於百邑，使原過主霍泰山祠祀。」「晉陽之圍」につ

いては『戰國策』趙策に詳しい。「張孟同」、趙策は「張孟談」に作る。

(13) 趙世家正義「何休云『八尺曰版。』八尺は約一八〇センチメートル。

(14) 趙世家「幽繆王遷」三年，秦攻赤麗、宜安，李牧率師與戰肥下，卻之。封牧爲武安君。四年，秦攻番吾，李牧與之戰，卻之。五年，代地大動，自樂徐以西，北至平陰，臺屋牆垣大半壞，地坼東西百三十步。六年，大饑，民譌言曰『趙爲號，秦爲笑。以爲不信，視地之生毛。』七年，秦人攻趙，趙大將李牧、將軍司馬尚將，擊之。李牧誅，司馬尚免，趙忽及齊將顏聚代之。趙忽軍破，顏聚亡去。以王遷降。八年十月，邯鄲爲秦。太史公曰吾聞馮王孫曰『趙王遷，其母倡也，嬖於悼襄王。悼襄王廢適子嘉而立遷，遷素無行，信讒，故誅其良將李牧，用郭開。』豈不繆哉。」

(15) 『史記』廉頗藺相如列傳「趙王遷七年，秦使王翦攻趙，趙使李牧、司馬尚禦之。秦多與趙王寵臣郭開金，爲反間，言李牧、司馬尚欲反。趙王乃使趙蔥及齊將顏聚代李牧。李牧不受命，趙使人微捕得李牧，斬之，廢司馬尚。後三月，王翦因急擊趙，大破殺趙蔥，虜趙王遷及其將顏聚，遂滅趙。」趙括は名將趙奢の子。秦の間者の言を信じた孝成王によつて廉頗に代わつて登用された。趙奢は生前趙括の將才を否定していた。夫の言葉を聞いていた趙括の母は王に反対したが、聞きいれられなかった。趙世家「孝成王」七年，廉頗免而趙括代將。秦人圍趙括，趙括以軍降，卒四十餘萬皆阬之。王悔不聽趙豹之計，故有長平之禍焉。」吳樹平、王利器とも孫詒讓『札逸』を引き、応劭の誤りではなく伝写の誤りという。

(16) この時の童謡ではなく、その前々年の地震と前年の飢饉の時のもの。注(14)参照。

〔訳〕

簡子の死後、無卹が後継となった。これが襄子である。知伯が襄子を攻めると、襄子は逃走し晋陽を守った。原過は襄子に従ったが遅れてしまい、王沢まで来ると三人の男に出会った。彼らは帯より上は見えたが、帯の下は見えなかった。彼らは原過に中を通じていない二節の竹を手渡し、「余のためにこれを趙無卹に手渡しなさい」といった。原過は襄子に追いつくとこのことを報告した。襄子は三日間潔斎し、自ら竹を割ると中に朱書が入っていた。そこには「無卹よ、余は霍太山の山陽公、天の使者である。三月丙戌の日、余は汝に智氏を返り討ちにして滅ぼさせるだろう。そうなったら百邑の地に祠を立てて余を祀れ。余は汝に林胡の地を賜るだろう。汝の後世に強大な王が現れる。この人は赤黒く竜のような顔つきで鳥のような口、ふさふさとした髯と眉、大きな胸、長い下半身にたくましい上半身をしており、左前の着物に甲冑を着て馬に騎り、河宗(黄河中流域) 一帯を手に入れ、休溷・諸貉など戎狄の地に至り、南は晋の別城を伐ち、北は黒姑を滅ぼすだろう」と書かれていた。襄子は再拜し三神の令を受け取った。(知伯・韓・魏) 三国は晋陽を攻め、一年余りすると、汾水の水を晋陽の城内に注ぎ込み、城壁はあと三板を残して水没した。城中では釜をつり下げて煮炊きをし、食料がなくなつて互いの子を替えて食い合った。襄子は夜中に張孟談を韓と魏の

元に派遣した。韓・魏は寝返り、襄子と呼応して知氏を滅ぼし、知氏の領地を分け合った。こうして趙は北は代を領有し、南は知氏の土地を併合した。そこで百邑に祠を立てて三神を祀り、原過に霍太山を治めさせた。武靈王に至つて、胡服騎射し、領土を千里に拡げた。幽繆王遷の時に秦の反間の言葉を信じ、良将李牧を殺して代わりに凡将趙括を任用し、その結果秦に滅ぼされてしまった。当時民間で「趙は泣き、秦は笑う。信じないなら、地上に毛(草)が生えているのを見よ」という童謡が歌われた。

〈田齊〉

陳完字敬仲、陳厲公之子也(1)。初、懿氏卜妻之(2)、其繇(3)曰「是謂『鳳凰于飛、和鳴鏘鏘(4)』。有媯之後、將育于姜(5)。五世其昌、並于正卿(6)。八世之後、莫之與京(7)。」周史有以周易筮之(8)、遇觀之否(9)、曰「是謂『觀國之光、利用賓于王(10)』。此其代陳有國乎。不在此、其在異國(11)。非此其身、在其子孫(12)。光遠而自他有輝者也。」

厲公爲蔡所滅殺(13)、國內亂、完奔于齊(14)。齊侯以爲卿、辭曰「羈旅之臣、幸若獲宥、及於寬政、赦其不閑教訓而免諸罪戾、弛於負擔(15)、君之惠也、所獲多矣。敢辱高位、以速官謗(16)。詩云『翹翹車乘、招我以弓。豈不欲往、畏我友朋(17)』。」使爲工正(18)。

飲桓公酒、樂(19)、公曰「以火。」辭曰「臣卜其晝、未卜其夜(20)、不敢。」君子曰「酒以成禮、弗繼以淫、義也

(21)。以君成禮，弗納於淫，仁也。」桓公嘉之，愛敬日新，位比高、國(22)，始食田采，姓田氏焉(23)。

六世田成殺簡公(24)。其三世曰和(25)，遷康公於海上，食一城，以祠太公以下(26)。後魏文侯乃使使言周天子及諸侯，列於周室(27)。其孫曰威王(28)。到王建，用后勝之計(29)，又賓客多受秦金，勸王朝秦，不脩戰備，秦兵平步入臨菑，民無敢格者(30)。遷王建於共，國人歌之曰「松耶柏耶，亡建共者客耶(31)」。疾建用客之不詳也(32)。

〔注〕

(1) 『史記』田敬仲完世家「陳完者，陳厲公他之子也。：厲公者，陳文公少子也，其母蔡女。文公卒，厲公兄鮑立，是爲桓公。桓公與他異母。及桓公病，蔡人爲他殺桓公鮑及太子免而立他，爲厲公。」陳杞世家「文公元年，取蔡女，生子佗。十年，文公卒，長子桓公鮑立。：三十八年正月甲戌己丑，桓公鮑卒。桓公弟佗，其母蔡女，故蔡人爲佗殺五父及桓公太子免而立佗，是爲厲公。桓公病而亂作，國人分散，故再赴。厲公二年，生子敬仲完。」『春秋左氏傳』桓公五年「春正月甲戌己丑，陳侯鮑卒，再赴也。於是陳亂，文公子佗殺太子免而代之。公疾病而亂作，國人分散，故再赴。」田敬仲完世家によれば「敬仲」は「謚」である。注(23)参照。

(2) 田敬仲完世家と陳杞世家には「初」の字が無く、懿仲を「齊懿仲」とし、「卜」の記事を、田完が齊に奔り、桓公から卿に授けられるのを辞退した後に続ける。田敬仲完世家「齊懿仲欲妻完，卜之，占曰『是謂鳳皇于蜚，和鳴鏘鏘。有媯之後，將育于姜。五世其昌，並于正卿。八世之後，莫之與京。』卒妻完。完之奔齊，齊桓公立十四年矣。」『春秋左氏傳』莊公二十二年は、齊桓公と田

完の夜宴をめぐるやりとりの後に「初，懿氏卜妻敬仲」と続け、杜預は「懿氏，陳大夫。龜曰卜」という。今、これに従う。さらにこの後に「周史」が「周易」で占ったことを載せる。

(3) 『春秋左氏傳』閔公二年杜注「繇，卦兆之古辭。」

(4) 杜注「雄曰鳳，雌曰皇。雄雌俱飛，相和而鳴，鏘鏘然，猶敬仲夫妻，相隨適齊，有聲響。」

(5) 杜注「譌，陳姓。姜，齊姓。」陳杞世家「陳胡公滿者，虞帝舜之後也。昔舜爲庶人時，堯妻之二女，居于媯汭，其後因爲氏姓，姓媯氏。舜已崩，傳禹天下，而舜子商均爲封國。夏后之時，或失或續。至于周武王克殷紂，乃復求舜後，得媯滿，封之於陳，以奉帝舜祀，是爲胡公。」齊太公世家「太公望呂尚者，東海上人。其先祖嘗爲四嶽，佐禹平水土甚有功，虞夏之際封於呂，或封於申，姓姜氏。夏商之時，申、呂或封枝庶子孫，或爲庶人，尚其後苗裔也。本姓姜氏，從其封姓，故曰呂尚。」

(6) 「五世」は田乞をさすか。下文に「六世田成」とある。田成は田乞の子。田敬仲完世家「田釐子乞事齊景公爲大夫，：田氏得齊衆心，宗族益彊，民思田氏。：遂立陽生於田乞之家，是爲悼公。：悼公既立，田乞爲相，專齊政。」

(7) 陳杞世家集解「賈逵曰『京，大也』」正義「按，陳敬仲八代孫，田常之子襄子磐也。而杜以常爲八代者，以桓子無宇生武子開與釐子乞，皆相繼事齊，故以常爲八代。」田常は田乞の子。吳樹平は「八世之後」は襄子の子莊子白とする。その子が太公和で、齊侯となった。注(27)参照。

(8) 田敬仲完世家「完生，周太子過陳，陳厲公使卜完，卦得觀之否，『是爲「觀國之光，利用賓于王」。此其代陳有國乎。不在此，

而在異國乎。非此其身也，在其子孫。若在異國，必姜姓。姜姓，四嶽之後。物莫能兩大，陳衰，此其昌乎。」陳杞世家「厲公二年，生子敬仲完，周太史過陳，陳厲公使以周易筮之，卦得觀之否。

『是爲「觀國之光，利用賓于王」。此其代陳有國乎。不在此，其在異國。非此其身，在其子孫。若在異國，必姜姓。姜姓，太嶽之後。物莫能兩大，陳衰，此其昌乎。』《春秋左氏傳》莊公二十二年「陳厲公，蔡出也，故蔡人殺五父而立之。生敬仲，其少也，周史有以周易見陳侯者，陳侯使筮之，遇觀之否，曰『是謂「觀國之光，利用賓于王」，此其代陳有國乎。不在此，其在異國。非此其身，在其子孫。光遠而自他有耀者也。坤，土也。巽，風也。乾，天也。風爲天於土上，山也。有山之材，而照之以天光，於是乎居土上，故曰「觀國之光，利用賓于王」。：猶有觀焉，故曰「其在後乎」。風行而著於土，故曰「其在異國乎」。若在異國，必姜姓也。姜，大嶽之後也。山嶽則配天。物莫能兩大，陳衰，此其昌乎。』

(9) 陳杞世家集解「賈逵曰『坤下巽上，觀。坤下乾上，否也。觀爻在六四，變而之否。』』《論衡》卜筮「夫卜曰逢，筮曰遇，實遭遇所得，非善惡所致也。」

(10) 『周易』觀「坤下巽上。：：六四，觀國之光，利用賓于王。象曰觀國之光，尚賢也。」否「坤下乾上。：：九四，有命无咎，疇離祉。象曰有命无咎，志行也。」《春秋左氏傳》杜注「易之爲書，六爻皆有變象，又有互體，聖人隨其義而論之。」

(11) 陳杞世家正義「六四變，內卦爲中國，外卦爲異國。」

(12) 陳杞世家正義「內卦爲身，外卦爲子孫。變在外，故知在子孫也。」

(13) 田敬仲完世家「厲公既立，娶蔡女。蔡女淫於蔡人，數歸，

厲公亦數如蔡。桓公之少子林怨厲公殺其父與兄，乃令蔡人誘厲公而殺之。林自立，是爲莊公。故陳完不得立，爲陳大夫。厲公之殺，以淫出國，故春秋曰『蔡人殺陳他』，罪之也。」

(14) 田敬仲完世家「莊公卒，立弟杵臼，是爲宣公。宣公二十一年，殺其太子禦寇。禦寇與完相愛，恐禍及己，完故奔齊。齊桓公欲使爲卿，辭曰『羈旅之臣，幸得免負擔，君之惠也，不敢當高位。』桓公使爲工正。」《春秋左氏傳》莊公二十二年「春，陳人殺太子禦寇。陳公子完與顓孫奔齊，顓孫自齊來奔。齊侯使敬仲爲卿。辭曰『羈旅之臣，幸若獲宥，及於寬政，赦其不閑於教訓，而免於罪戾，弛於負擔，君之惠也，所獲多矣。敢辱高位，以速官謗。請以死告。詩云「翹翹車乘，招我以弓。豈不欲往，畏我友朋。」』使爲工正。飲桓公酒，樂，公曰『以火繼之。』辭曰『臣卜其晝，未卜其夜，不敢。』君子曰『酒以成禮，不繼以淫，義也。以君成禮，弗納於淫，仁也。』

(15) 杜注「弛，去離也。」

(16) 『國語』楚語下「是之不恤，而蓄聚不厭，其速怨於民多矣。」韋昭注「速，召也。」

(17) 杜注「逸詩也。翹翹，遠貌。古者聘士以弓。言雖貪顯命，懼爲朋友所譏責。」

(18) 杜注「掌百工之官。」田敬仲完世家正義「工巧之長，今將作大匠。」

(19) 杜注「齊桓賢之，故就其家會。據主人之辭，故言飲桓公酒。」

(20) 杜注無。疏「服虔云『臣將享君，必卜之，示戒慎也。』」晏子春秋「晏子飲景公酒，日暮，公呼具火。晏子辭曰『詩云：：

「既醉以酒，既飽以德，既醉而出，并受其福」，賓主之禮也。「醉

而不出，是謂伐德，賚之罪也。嬰已卜其日，未卜其夜。』公曰『善。』舉酒祭之，再拜而出。」

(21) 杜注「夜飲爲淫樂。」『詩經』小雅湛露「厭厭夜飲，在宗載考。」毛傳「夜飲，必於宗室。」鄭箋「夜飲之禮，在宗室同姓，諸侯則成之。於庶姓，其讓之則止。昔者陳敬仲飲桓公酒而樂，桓公命以火繼之。敬仲曰『臣卜其晝，未卜其夜。』於是乃止。此之謂不成也。」

(22) 『春秋左氏傳』僖公十二年「冬，齊侯使管夷吾，平戎于王，使隰朋平戎于晉。王以上卿之禮饗管仲。管仲辭曰『臣賤有司也。有天子之二守國、高在。』」杜注「國子、高子，天子所命爲齊守臣，皆上卿也。」

(23) 田敬仲完世家「完卒，諡爲敬仲。仲生穉孟夷。敬仲之如齊，以陳字爲田氏。」集解「徐廣曰『應劭云始食菜地於田。由是改姓田氏。』」索隱「據如此云，敬仲奔齊，以『陳』『田』二字聲相近，遂以爲田氏。應劭云『始食菜於田』，則田是地名，未詳其處。」

正義「案，敬仲既奔齊，不欲稱本國故號，故改陳字爲田氏。」

(24) 田敬仲完世家「田乞卒，子常代立，是爲田成子。鮑牧與齊悼公有郤，弑悼公。齊人共立其子壬，是爲簡公。田常成子與監止俱爲左右相，相簡公。田常心害監止，監止幸於簡公，權弗能去。」

：「子我者，監止之宗人也，常與田氏有郤。：子我舍公宮，田常兄弟四人乘如公宮，欲殺子我。子我閉門。簡公與婦人飲檀臺，將欲擊田常。太子子餘曰『田常非敢爲亂，將除害。』簡公乃止。田常出，聞簡公怒，恐誅，將出亡。田子行曰『需，事之賊也。』田常於是擊子我。子我率其徒攻田氏，不勝，出亡。田氏之徒追殺子我及監止。簡公出奔，田氏之徒追執簡公于徐州。簡公曰『蚤從御

鞅之言，不及此難。』田氏之徒恐簡公復立而誅己，遂殺簡公。簡公立四年而殺。」『春秋左氏傳』哀公十四年に記事有り。

(25) 田敬仲完世家「田常卒，子襄子盤代立，相齊。：襄子卒，子莊子自立。田莊子相齊宣公。：莊子卒，子太公和立。田太公相齊宣公。」

(26) 田敬仲完世家「宣公卒，子康公貸立。貸立十四年，淫於酒、婦人，不聽政。太公乃遷康公於海上，食一城，以奉其先祀。」

(27) 田敬仲完世家「三年，太公與魏文侯會濁澤，求爲諸侯。魏文侯乃使使言周天子及諸侯，請立齊相田和爲諸侯。周天子許之。康公之十九年，田和立爲齊侯，列於周室，紀元年。」

(28) 田敬仲完世家「齊侯太公和立二年，和卒，子桓公午立。：六年，救衛。桓公卒，子威王因齊立。是歲，故齊康公卒，絕無後，奉邑皆入田氏。：二十六年，魏惠王圍邯鄲，趙求救於齊。：十月，邯鄲拔，齊因起兵擊魏，大敗之桂陵。於是齊最彊於諸侯，自稱爲王，以令天下。」

(29) 田敬仲完世家「(王建) 四十四年，秦兵擊齊。齊王聽相后勝計，不戰，以兵降秦。秦虜王建，遷之共。遂滅齊爲郡。」

(30) 田敬仲完世家「始，君王后賢，事秦謹，與諸侯信，齊亦東邊海上，秦日夜攻三晉、燕、楚，五國各自救於秦，以故王建立四十餘年不受兵。君王后死，后勝相齊，多受秦間金，多使賓客入秦，秦又多予金，客皆爲反間，勸王去從朝秦，不脩攻戰之備，不助五國攻秦，秦以故得滅五國。五國已亡，秦兵卒入臨淄，民莫敢格者。王建遂降，遷於共。故齊人怨王建不蚤與諸侯合從攻秦，聽姦臣賓客以亡其國，歌之曰『松耶柏耶，住建共者客耶。』疾建用客之不詳也。」「君王后」は襄王の后、王建の実母。

(31) 田敬仲完世家集解「徐廣曰『戰國策云秦處建於共松柏間也』」
 索隱「耶音邪。謂是建客邪，客說建住言遂乃失策，今建遷共。共，
 今在河內也。」『戰國策』齊策「秦使陳馳誘齊王內之，約與五百
 里之地。齊王不聽卽墨大夫而聽陳馳，遂入秦。處之共松柏之間，
 餓而死。先是齊爲之歌曰『松邪柏邪。住建共者客耶。』」

(32) 田敬仲完世家索隱「謂不詳審用客，不知其善否也。」

〔訳〕

陳完は字敬仲といい、陳の厲公の子である。かつて陳の
 大夫の懿氏が、娘を敬仲に嫁がせる際に龜卜で占ったとこ
 ろ、「この結婚は『つがいの鳳凰は連れだつて飛び、樂し
 げに鳴き交わす』となる。有媯氏（陳）の後裔が姜氏（齊）
 で育ち、五世で榮えて正卿に列なり、八世の後は並ぶ者が
 ないほど大きくなる」という結果がでた。それより前、田
 完が生まれたとき、陳を訪れていた周の史官が周易で卜筮
 したところと、まず「觀」の卦が出て次に「否」の卦が出
 た。史官は言った、「これは『觀』の六四爻辞『国の光を
 觀る、用つて王に賓たるに利あり』に当たります。このお
 子は陳に代わつて国を持つでしょう。この国においてでは
 なく、異国においてです。このお子自身ではなく、子孫の
 時です。なぜなら光は遠くよそから照らしてくるものだけ
 らです。」

（厲公の異母兄桓公とその太子は厲公のために殺され、桓
 公の少子のちの莊公は厲公を恨んでいた。）厲公は妻の蔡
 女とともに蔡国に滞在していたとき、（莊公の指図をうけ
 た）蔡人に殺された。（莊公が即位し、そのため完は即位

できなかつた。莊公の弟宣公の二十一年）陳は乱れ、完は
 禍が及ぶのを恐れて齊に奔つた。齊の桓公は彼を卿にしよ
 うとしたが、完は辞退していった。「羈旅の臣である私は
 幸いにこちらに住まうことを許され、寛大に待遇してい
 だいております。こちらの習わしに慣れずに何かと粗相が
 多いことも大目に見て、負担を軽くしていただいているだ
 けでも、君のお恵みは大きなものでございます。どうして
 卿などという高位を辱めてお役人の皆様の誇りを受ける
 などということができましようか。詩にも『遠方からはる
 ばるお召しの車がきて、私にするしの弓を下さつた。どう
 して行きたくないと申しましよう、ただ我が朋友の目を畏
 れるのです』とあります。」そこで桓公は工正の官に任じ
 た。

ある日桓公の酒宴に相伴し、楽しんでいるうちに日が暮
 れた。桓公が「灯りをつけよ」というと、完は「臣完は昼
 の宴については可否を占いましたが、夜については占つて
 おりませんので、もうご相伴はできかねます」と辞退した。
 このことを『春秋』において君子は「酒は礼の仕上げに用
 いる。だからだと夜まで酒宴を続けさせなかつたのは義で
 あり、主君に礼を全うさせ、度を過ぎさせなかつたのは仁
 である」と評価した。桓公はこれを褒め、田完に対する敬
 愛は日々増していき、齊における位は上卿の国子、高子に
 並んだ。田の地を扶持として授けられ田氏を姓とした。

六代後の田成子が齊簡公を殺した。その三代後は田和と
 いい齊康公を海浜に遷し、一城を食邑としてそこで太公呂

尚以下の先祖を祀らせた。その後魏文侯が使者を周に派遣して天子と諸侯に田和を齊侯として周の諸侯に列なるよう要請し認められた。太公田和の孫が威王で、初めて王と称した。王建に至って秦に買収された宰相后勝の計を用い、戦わずして秦に降った。又秦の金を受け取った多くの賓客に勧められるままに秦に朝献し、軍備を整えなかった。秦の兵は武装もせず齊都臨淄に入城し、民も敢えて抵抗するものがいなかった。王建は共城に遷された。齊国の人びとは「松よ、柏よ、建を共に追い込んだのはあの賓客たちだろうか」と歌い、王建の見る目がなく賓客の使い方を知らなかったことをにくんだ。

〈謹按〉

謹按、『戰國策』『太史公記』(1)、秦孝公據殽、函之固(2)、擁雍州之地(3)、君臣戮力(4)、以窺周室、有席卷天下、囊括八荒之意(5)。當是之時、商君佐之(6)、內立法度、務耕織、脩守戰之備、外恃猛將銳卒、因間伺隙、略定西河之城(7)、南並漢中、西定巴、蜀(8)、東割膏腴之壤、收要害之郡(9)。諸侯恐懼、會盟而謀(10)、不愛尊爵重寶、以致天下之士(11)。當此之時、齊有孟嘗(12)、趙有平原(13)、楚有春申(14)、魏有信陵(15)。夫四豪者、皆明智而忠信、寬厚愛人(16)、兼韓、魏、燕、趙、宋、衛、中山之衆(17)。其後復(18)有甯越(19)、蘇秦(20)、杜赫(21)之屬爲之謀、陳軫(22)、召滑(23)、樂毅(24)之徒通其意、吳起(25)、孫臏(26)、廉頗(27)之屬(28)制其兵。嘗以十倍

之地、百萬之軍攻秦(29)。秦人開關延敵、六國之師遁逃(30)而不敢進。秦無一矢遺鏃之費、而關東已困(31)。於是從散約敗、爭割地而賂秦、秦有餘力而制其弊。及至始皇、承六世之遺烈(32)、抗長策(33)而御宇內、吞二周(34)而叱諸侯(35)、履至尊而制六合(36)、兼帝皇而威四海(37)。

〔注〕

(1) 「秦孝公」から「威四海」まで、省略や語句の改変はあるが、おおよそ賈誼「過秦論」上篇に沿っている。『史記』秦始皇本紀「太史公曰」に「過秦論」を下篇上篇の順で引く。陳涉世家には「褚先生曰」として上篇のみを引く。『漢書』陳勝項籍傳贊も上篇のみを引用する。その注に「應劭曰賈生書有過秦二篇、言秦之過。此第一篇也。司馬遷取以爲贊、班固因之」とある。「過秦論」は下篇を二つに分けて、上中下とするものもある。『文選』は「過秦論」上篇のみ収録。以下「師古曰」「張晏曰」とするのは陳勝項籍傳の注、また『新書』とするのは『新書』所収「過秦論」。(2) 師古曰「殽謂殽山、今陝縣東二穀是也。函謂函谷、今桃林縣南洪溜澗是也。」『戰國策』秦策「蘇秦始將連橫、說秦惠王曰『大王之國、西有巴、蜀、漢中之利、北有胡貉代馬之用、南有巫山、黔中之限、東有肴、函之固。』」高誘注「肴、在澗池西。函關、舊在弘農城北門外、今在新安東。固、牢堅、難攻易守也。」(3) 「雍州」は古九州の一。『尚書』禹貢「黑水、西河惟雍州。」孔傳「西距黑水、東據河。龍門之河在冀州西。」(4) 秦始皇本紀と『漢書』は「君臣固守」に、「新書」は「居臣固守」に作る。『國語』吳語「今伯父曰『勳力同德。』」韋昭注「勳、并也。」

- (5) 『新書』は「包舉宇内，囊括四海之意，并吞八荒之心」に、『漢書』は「包舉宇内，囊括四海，并吞八荒之心」に作る。張晏曰「括，結囊也，言其能包含天下。」師古曰「八荒，八方荒忽極遠之地也。」『說苑』辨物「八荒之内有四海，四海之内有九州。天子處中州而制八方耳。兩河間曰冀州，河南曰豫州，河西曰雍州。」
- (6) 『史記』秦本紀「孝公元年：周室微，諸侯力政，爭相併。秦僻在雍州，不與中國諸侯之會盟，夷翟遇之。孝公於是布惠，振孤寡，招戰士，明功賞。下令國中曰『：寡人思念先君之意，常痛於心。賓客羣臣有能出奇計彊秦者，吾且尊官，與之分土。』：衛鞅聞是令下，西入秦，因景監求見孝公。：三年，衛鞅說孝公變法修刑，內務耕稼，外勸戰死之賞罰，孝公善之。甘龍、杜摯等弗然，相與爭之。卒用鞅法，百姓苦之。居三年，百姓便之。乃拜鞅爲左庶長。：二十二年，衛鞅擊魏，虜魏公子卬。封鞅爲列侯，號商君。：孝公卒，子惠文君立。是歲，誅衛鞅。：及孝公卒，太子立，宗室多怨鞅，鞅亡，因以爲反，而卒車裂以徇秦國。」
- (7) 以上三句、『新書』『漢書』、「外連衡而鬪諸侯，於是秦人拱手而取西河之外」に作り、さらに下に「孝公既没，惠文、武、昭襄蒙故業，因遺策」と続ける。秦本紀「(惠文君) 七年，公子卬與魏戰，虜其將龍賈，斬首八萬。八年，魏納河西地。九年，渡河，取汾陰、皮氏。與魏王會應。圍焦，降之。十年，張儀相秦。魏納上郡十五縣。」
- (8) 以上二句、『新書』『漢書』、「南取漢中，西舉巴蜀」に作る。秦本紀「(惠文君後) 九年，司馬錯伐蜀，滅之。：十三年，庶長章擊楚於丹陽，虜其將屈○，斬首八萬，又攻楚漢中，取地六百里，置漢中郡。」(○は勺の中に亡。)
- (9) 『史記』李斯列傳「斯乃上書曰『：惠王用張儀之計，拔三川之地，西并巴、蜀，北收上郡，南取漢中，包九夷，制鄢、郢，東據成皋之險，割膏腴之壤，遂散六國之從，使之西面事秦，功施到今。』」
- (10) 『新書』『漢書』、「謀」の下に「弱秦」有り。
- (11) 『新書』『漢書』、「重寶」の下に「肥饒之地」有り。また「天下之士」の下に「合從締交，相舉爲一」と続ける。ただし『漢書』は「舉」を「與」に作る。
- (12) 『史記』孟嘗君列傳「孟嘗君名文，姓田氏。文之父曰靖郭君田嬰。田嬰者齊威王少子而齊宣王庶弟也。：嬰卒，諡爲靖郭君。而文果代立於薛，是爲孟嘗君。孟嘗君在薛，招致諸侯賓客及亡人有罪者，皆歸孟嘗君。孟嘗君舍業厚遇之，以故傾天下之士。食客數千人，無貴賤一與文等。」
- (13) 『史記』平原君虞卿列傳「平原君趙勝者趙之諸公子也。庶子中勝最賢，喜賓客。賓客蓋至者數千人。平原君相趙惠文王及孝成王，三去相，三復位，封於東武城。」
- (14) 『史記』春申君列傳「春申君者楚人也，名歇，姓黃氏。游學博聞，事楚頃襄王。：春申君既相楚，是時齊有孟嘗君，趙有平原君，魏有信陵君，方爭下士，招致賓客，以相傾奪，輔國持權。」
- (15) 『史記』魏公子列傳「魏公子無忌者魏昭王少子而魏安釐王異母弟也。昭王薨，安釐王卽位，封公子爲信陵君。：公子爲人仁而下士，士無賢不肖皆謙而禮交之，不敢以其富貴驕士。士以此方數千里爭往歸之，致食客三千人。當是時，諸侯以公子賢、多客，不敢加兵謀魏十餘年。」

(16) 『新書』『漢書』は、この下に「尊賢重士，約從離衡」と続ける。ただし『漢書』は「衡」を「横」に作る。

(17) 秦始皇本紀のみ、「燕」の下に「齊、楚」二字有り。王利器は王念孫『讀書雜誌』の説を引き、二字を補うべき、という。

(18) 「其後復」三字、『新書』『漢書』等「於是六國之士」に作る。

(19) 『呂氏春秋』不苟論搏志「甯越，中牟之鄙人也。苦耕稼之勞，謂其友曰『何爲而可以免此苦也。』其友曰『莫如學。學三十歲則可以達矣。』甯越曰『請以十五歲。人將休，吾將不敢休，人將臥，吾將不敢臥。』十五歲而周威公師之。矢之速也，而不過二里止也。步之遲也，而百舍不止也。今以甯越之材，而久不止。其爲諸侯師，豈不宜哉。」高誘注「威公，西周君也。師之者，以甯越爲師也。」『漢書』藝文志諸子儒家「甯越一篇。中牟人，爲周威王師。」『新書』『漢書』、『甯越』の下に「徐尚」有り。

(20) 『史記』蘇秦列傳「蘇秦者東周雒陽人也。東事師於齊，而習之於鬼谷先生。……於是六國從合而并力焉。蘇秦爲從約長，并相六國。……蘇秦既約六國從親，歸趙，趙肅侯封爲武安君，乃投從約書於秦。秦兵不敢闕函谷關十五年。」

(21) 『呂氏春秋』土容論務大「杜赫以安天下說周昭文君。昭文君謂杜赫曰『願學所以安周。』杜赫對曰『臣之所言者不可，則不能安周矣。臣之所言者可，則周自安矣。此所謂以弗安而安者也。』」高誘注「杜赫，周人，杜伯之後也。周昭文君，周分爲二，東周之君也。」吳樹平はこの人とする。王利器も周人とし、『戰國策』周策、楚策、『呂氏春秋』に見えるところ。しかし、楚策に見える「杜赫」は楚人であり別人と思われる。楚策「楚杜赫說楚王以取趙。」又「五國伐秦。魏欲和，使惠施之楚。楚將入之秦而使行和。」

杜赫謂昭陽曰……」前者の策は陳軫の反対により実行されず、後者では杜赫が惠施の入秦を止めた。次に陳軫の名があることから、楚の杜赫を指すとする方がよいのではないか。

(22) 『史記』張儀列傳「陳軫者游說之士。與張儀俱事秦惠王，皆貴重，爭寵。」張儀が相となると陳軫は楚に奔った。『新書』『漢書』、この上に「齊明、周最」有り。

(23) 楚懷王は召滑を越に送って越の宰相に用いさせた。召滑は越に乱を引き起こし、楚は越を手に入れることができた。『史記』樛里子甘茂列傳、『戰國策』楚策に見える。

(24) 『史記』樂毅列傳「樂毅者其先祖曰樂羊。樂羊爲魏文侯將，伐取中山，魏文侯封樂羊以靈壽。……中山復國，至趙武靈王時復滅中山，而樂氏後有樂毅。樂毅賢，好兵，趙人舉之。及武靈王有沙丘之亂，乃去趙適魏。」魏の為に燕に使者として行き、燕昭王の好待遇に応えて仕えた。燕の為に斉を攻略したが、昭王の子恵王に疎んじられ趙に帰した。後悔した恵王は樂毅を呼び戻そうと書簡を送ったが樂毅はもどることはしなかったもの、また燕と通じ往來した。燕と趙は彼を客卿とした。趙で亡くなった。

(25) 『史記』孫子吳起列傳「吳起者衛人也，好用兵。嘗學於曾子，事魯君。齊人攻魯，魯欲將吳起，吳起取齊女爲妻，而魯疑之。吳起於是欲就名，遂殺其妻，以明不與齊也。魯卒以爲將。將而攻齊，大破之。」魯人で吳起を悪むものがおり、その言葉を信じた魯君は吳起を解任した。吳起は魏文侯の将となり秦を撃ち五城を抜いた。士卒と苦勞をともにする吳起は士卒の心を得て秦、韓に対抗した。魏文侯の子の武侯にも信任されていたが、相公叔の計略によって疑われ、魏を去りに楚行き、悼王の相となる。国政を改革

し強兵に務め、楚を強国にした。楚の貴戚に怨まれ、悼王が死ぬと、宗室大臣が乱を起こし、呉起を攻め殺した。

(26) 『孫子呉起列傳』孫子武者齊人也。以兵法見於吳王闔閭。……

闔廬知孫子能用兵，卒以爲將。西破彊楚，入郢，北威齊、晉，顯名諸侯，孫子與有力焉。孫武既死，後百餘歲有孫臏。臏生阿鄆之間，臏亦孫武之後世子孫也。「孫臏と俱に兵法を学び魏恵王の將軍となつた龐涓は孫臏の才能を妬み、彼を魏に招き寄せて罪におとし両足を切斷し入れ墨をするという刑罰を受けさせた。孫臏はたまたま魏に来ていた齊の使者に見込まれ齊に連れて行かれ、將軍田忌の推薦で威王の軍師となる。魏が趙を伐つと趙が齊に救援を求めた。孫臏は軍師として田忌に同行し、その策により魏軍を大破した。その十三年後にも田忌とともに魏を伐ち、龐涓の軍を策略で撃破し、龐涓を自殺に追い込んだ。孫臏の名は天下に頭れ、その兵法は世に伝わった。『新書』『漢書』、この下に「帶佗、倪良、王寥、田忌」を挙げる。

(27) 『史記』廉頗藺相如列傳「廉頗者趙之良將也。趙恵文王十六年，廉頗爲趙將伐齊，大破之，取陽晉，拜爲上卿，以勇氣聞於諸侯。」藺相如と刎頸の交わりをなす。

(28) 『新書』『漢書』、「廉頗」下に「趙奢」の名を挙げる。また「屬」字を「朋」に作る

(29) 『新書』、「百萬之師，仰關而攻秦」に、『漢書』、「百萬之軍，仰關而攻秦」に、秦始皇本紀「百萬之衆，叩關而攻秦」に作る。

(30) 『新書』、「九國之師逡巡」に、『漢書』、「九國之師遁巡」に、秦始皇本紀「九國之師逡巡遁逃」に作る。

(31) 『新書』『漢書』、「秦無亡矢遺鏃之費，而天下已困矣」に、始

皇帝本紀、「秦無亡矢遺鏃之費，而天下諸侯已困矣」に作る。

(32) 『新書』『漢書』等、「及至始皇」の上にやや文字が異なるが皆五十字ほど有り。また『新書』『漢書』、「奮六世之餘烈」に作る。秦始皇本紀は「始皇」を「秦王」とし、「續六世之餘烈」に作る。師古曰「孝公、恵文王、武王、昭襄王、孝文王、莊襄王、凡六君也。烈，業也。」

(33) 『新書』『漢書』等、「抗」字を「振」に作る。

(34) 『史記』周本紀「考王封其弟于河南，是爲桓公，以續周公之官職。桓公卒，子威公代立。威公卒，子恵公代立，乃封其少子於鞏以奉王，號東周恵公。……（顯王）四十四年，秦恵王稱王。其後諸侯皆爲王。四十八年顯王崩，子愼靚王定立。愼靚王立六年，崩，子赧王延立。王赧時東西周分治。王赧徙都西周。「索隱」西周，河南也。東周，鞏也。王赧微弱，西周與東分主政理，各居一都，故曰東西周。按，高誘曰『西周王城，今河南。東周成周，故洛陽之地。』秦が二周を滅ぼしたのは昭襄王と莊襄王の時。秦本紀（昭襄王）五十一年，……西周君背秦，與諸侯約從，將天下銳兵出伊闕攻秦，令秦毋得通陽城。於是秦使將軍摎攻西周。西周君走來自歸，頓首受罪，盡獻其邑三十六城，口三萬。秦王受獻，歸其君於周。五十二年，周民東亡，其器九鼎入秦。周初亡。……莊襄王元年：東周君與諸侯謀秦，秦使相國呂不韋誅之，盡入其國。秦不絶其祀，以陽人地賜周君，奉其祭祀。」

(35) 『新書』『漢書』等、「叱」字を「亡」に作る。王利器は形が似ているので誤ったのでは、という。これに従う。

(36) 『呂氏春秋』審分「神通乎六合，德耀乎海外。」高誘注「六合，四方上下也。海外，四海之外。」

(37) 『新書』『漢書』等、「執敲朴而鞭笞天下，威振四海」に作る。ただし『漢書』は「朴」を「扑」に作る。また秦始皇本紀は「敲朴」を「極拊」に作る。秦始皇本紀「二十六年：秦初并天下，令丞相、御史曰：『寡人以眇眇之身，興兵誅暴亂，賴宗廟之靈，六王咸伏其辜，天下大定。今名號不更，無以稱成功，傳後世。其議帝號。』丞相縮、御史大夫劫、廷尉斯等皆曰：『今陛下興義兵，誅殘賊，平定天下，海內爲郡縣，法令由一統，自上古以來未嘗有，五帝所不及。臣等謹與博士議曰：『古有天皇，有地皇，有泰皇，泰皇最貴。』臣等昧死上尊號，王爲泰皇，命爲制，令爲詔，天子自稱曰朕。』王曰『去泰，著皇，采上古帝位號，號曰皇帝。他如議。』」

〔訳〕

謹んで考察いたします。『戦国策』と『太史公記(史記)』は以下のように(秦が天下を統一する過程を)記している。秦の孝公は殽山と函谷関の堅固な守りに抛り、雍州の地を擁し、君臣ともに力を合わせ、周室の弱体を窺い、天下を席卷し極遠の八荒の地までも包括しようとした。この時、商君鞅が(衛から秦に入つて)孝公を補佐し、国内に於いては法律制度を確立し、民を農耕と養蚕織物に務めさせ、守戦のための軍備を整え、国外に対しては勇猛な將軍と先鋭の兵卒を恃んで、諸国の連合を離間させ、西河の外側を略取し、南は漢中を併せ、西は巴と蜀を平定し、東は諸侯から肥沃な土地を割譲させ、要害の郡を手に入れた。諸侯は恐懼し、互いに盟約し共に戦略を立て、尊い爵位、貴重な財宝を惜しまず投げ出して天下の賢士を招いた。この時、

齊には孟嘗君、趙には平原君、楚には春申君、魏には信陵君がいた。この四人の豪傑はいずれも明智にして忠信の人、寛容で情に厚く人を愛した。そのため韓・魏・燕・趙・宋・衛・中山から多くの食客が集まった。その後甯越・蘇秦・杜赫といったものたちが秦に対抗する策謀を練り、陳軫・召滑・樂毅らが意思を通じあい、呉起・孫臏・廉頗といった面々が兵法によって戦を制した。六国合わせて秦の十倍の地と百万の軍をもって常に秦を攻めた。しかし秦が函谷関を開いて敵を引き入れる策をとると、六国の軍は尻込みし敢えて進もうとしなかった。秦は矢や鏃の費用も使うことなく、関東諸国の軍は追い込まれてしまった。すると六国は合従の約を解消し、先を争って自国の地を割いて秦に差し出したので、秦は余力をもって疲弊した国々を制することができた。始皇帝の代になると、それ以前の六代の主君が蓄積した威力を継承し、鞭を振るって軍を遠方まで派遣し、天下に駆け巡らせた。東西二周を呑み込み諸侯をひれ伏させ、至尊の位に即いて天地四方を押さえ、「帝」と「皇」を併せた「皇帝」を称して天下にその威厳を見せつけた。

于時議者恨楚之疏遠屈原(1)、魏不用公子無忌(2)、故國削以至於亡。秦因愚弱之極運，震電之蕭條(3)、混壹海内(4)、爲漢驅除(5)。蓋乘天之所壞，誰能枝之(6)。雖阿衡宰政(7)、賁育馭戎(8)、何益於事。且有疆兵良謀，雜襲繼踵(9)、每輒挫衄(10)、亦足以祛蔽啓蒙矣。始皇自

以關中之固，金城千里，子孫帝王萬世之業也(11)。遂恣睢舊習(12)，矯任其私知，坑儒燔書(13)，以愚其黔首(14)，窮奢肆欲，力役無饜，毒流諸夏，亂延蠻貊。由是二世絕祀，以成大漢之資。高祖踐祚(15)，四海乂安(16)。世宗攘夷境(17)，崇演禮學，制度文章，冠於百王矣(18)。

〔注〕

(1) 〈楚〉項參照。

(2) 信陵君のこと。前段注(15)參照。魏王は公子信陵君の實力を畏れ、国政から遠ざけた。秦に攻められた趙が救援を魏に求めたとき、秦を恐れる魏王は態度をはっきりさせなかったが、信陵君は独自に趙を救援した。魏王の不興を知る信陵君はそのまま趙に十年止まったが、秦の攻撃を受ける魏を見かね、魏にもどり兵を將いて秦軍を破った。信陵君の存在を患う秦は反間を試み、それにかかった魏王はまた信陵君を疎んじる。それを知った信陵君は日夜暴飲し死んだ。秦はその死を聞くと魏を攻め徐々に蚕食し十八年で魏を滅ぼした。

(3) 吳樹平は「極」字の下で句切るが、王利器に従う。『文選』范蔚宗「宦者論」「斯亦運之極乎。」李善注「應劭風俗通曰『秦因愚弱之極運。』」

(4) 『戰國策』楚策一「張儀爲秦破從連橫，說楚王曰『…夫一詐僞反覆之蘇秦，而欲經營天下，混一諸侯，其不可成也亦明矣。』」『漢書』翟方進傳「同律度量，混壹風俗」師古曰「混亦同也，音胡本反。」

(5) 『史記』秦楚之際月表「秦既稱帝，患兵革不休，以有諸侯也，於是無尺土之封，墮壞名城，銷鋒鏑，鉏豪傑，維萬世之安。然王

跡之興，起於閭巷，合從討伐，軼於三代，鄉秦之禁，適足以資賢者爲驅除難耳。」索隱「謂秦前時之禁兵及不封樹諸侯，適足以資後之賢者，卽高帝也。言驅除患難耳。」

(6) 『國語』周語下「周詩有之曰『天之所支，不可壞也。其所壞，亦不可支也。』昔武王克殷，而作此詩也，以爲飢歌，名之曰『支』，以遺後之人，使永監焉。」韋昭注「周詩，飢時所歌也。支，柱也。」

(7) 『詩經』商頌長發「實維阿衡，實左右商王。」毛傳「阿衡，伊尹也。左右，助也。」鄭箋「阿，倚，衡，平也。伊尹，湯所依倚而取平，故以爲官名。商王，湯也。」

(8) 『史記』司馬相如列傳「相如上疏諫之，其辭曰『臣聞物有同類而殊能者。故力稱烏獲，捷言慶忌，勇期賁、育。』」正義「賁，音奔。孟賁，古之勇士，水行不避蛟龍，陸行不避豺狼，發怒吐氣，聲音動天。夏育，亦古之猛士也。」

(9) 『漢書』蒯伍江息夫傳「蒯」通因請問，曰「天下初作難也，俊雄豪傑，建號壹呼，天下之士，雲合霧集，魚鱗雜襲，飄至風起。」師古曰「雜襲猶雜沓，言相雜而累積。」

(10) 「衄」は「衄」に同じ。戦に負けること。『吳越春秋』夫差內傳「吳王還，乃讓子胥曰『…今大夫昏耄而不自安，生變起詐，怨惡而出，出則罪吾士衆，亂吾法度。欲以妖孽挫衄吾師。』」

(11) 『新書』「過秦論」上「天下已定，始皇之心，自以爲關中之固，金城千里，子孫帝王萬世之業也。」『史記』留侯世家「夫關中左殺函，右隴蜀，沃野千里，南有巴蜀之饒，北有胡苑之利，阻三面而守，獨以一面東制諸侯。…此所謂金城千里，天府之國也。」索隱「按，此言『謂』者，皆是依憑古語。言秦有四塞之國，如金城也。故淮南子云『雖有金城，非粟不守。又蘇秦說秦惠王云『秦

地勢形便，所謂天府。」是所憑也。』秦始皇本紀「制曰『朕聞太古有號毋論，中古有號，死而以行為論，如此則子讓父，臣讓君也。甚無謂，朕弗取焉。自今已來，除諡法，朕爲始皇帝。後世以計數，二世三世至于萬世，傳之無窮。』」

(12) 『莊子』大宗師「夫堯既已黥汝以仁義，而劓汝以是非矣，汝將何以遊夫遙蕩恣睢轉徙之塗乎。」成玄英疏「恣睢，縱任也。」

(13) 秦始皇本紀「三十四年，……丞相李斯曰『……臣請史官非秦記皆燒之。非博士官所職，天下敢有藏詩、書、百家語者，悉詣守、尉雜燒之。有敢偶語詩書者，棄市，以古非今者族。吏見知不舉者與同罪。令下三十日不燒，黥爲城旦。所不去者，醫藥、卜筮、種樹之書。若欲有學法令，以吏爲師。』制曰『可。』……三十五年，……侯生、盧生相與謀：……於是乃亡去。始皇聞亡，乃大怒曰『……盧生等吾尊賜之甚厚，今乃誹謗我，以重吾不德也。諸生在咸陽者，吾使人廉問，或爲妖言以亂黔首。』於是使御史悉案問諸生，諸生傳相告引，乃自除。犯禁者四百六十餘人，皆阬之咸陽，使天下知之，以懲後。益發謫徙邊。」

(14) 秦始皇本紀「二十六年，……分天下以爲三十六郡，郡置守、尉、監。更名民曰黔首。」集解「應劭曰『黔亦黎，黑也。』」漢書「藝文志「戰國從衡，眞僞分爭，諸子之言紛然殺亂。至秦患之，乃燔滅文章，以愚黔首。」師古曰「燔，燒也。秦謂人爲黔首，言其頭黑也。」

(15) 「祚」字、吳樹平、王利器ともに盧文弨『拾補』により「阼」に作るべきという。『禮記』曲禮下「踐阼，臨祭祀。」孔穎達疏「踐，履也。阼，主人階也。天子祭祀，升阼階，……履士階行事，故云踐阼也。」

(16) 『史記』封禪書「元年，漢興已六十餘歲矣，天下艾安，搢紳之屬皆望天子封禪改正度也。」

(17) 『漢書』宣帝紀「本始二年，……六月庚午，尊孝武廟爲世宗廟，奏盛德、文始、五行之舞，天子世世獻。」王利器、『拾補』に從い「境」字の上に「辟」を加える。これに從う。『韓非子』飾邪「秦以其大吉，辟地有實，救燕有有名。」

(18) 『漢書』敘傳下「固以爲唐虞三代，詩書所及，世有典籍，故雖堯舜之盛，必有典謨之篇，然後揚名於後世，冠德於百王，故曰『巍巍乎其有成功，煥乎其有文章也。』」

〔訳〕

その当時議論する人びとは、楚が屈原を疎んじて遠ざけ、魏が公子無忌（信陵君）を任用できず、国が削られ滅亡したことを残念がった。しかし、これらの国々は愚弱のため運が尽きたのであり、雷に打たれた後のように天下が蕭条と静まりかえってしまった。それに乘じて秦は統一を果したのだが、それは漢のために天下を掃き清めたのである。そもそも天が壊そうとしているものを誰が支えることができようか。殷の湯王を補佐した阿衡伊尹が宰相となり、孟賁・夏育のような猛将が戦場を制馭したとしても、何の益があっただろう。ましてや秦には勝れた武将や良謀を勧める客臣が、次から次へとやってきて任用された。そのため失敗があってもそのたびに旧弊を除き改めることができたのである。始皇帝は自ら関中の堅固な守りは千里にわたる鉄壁であり、帝王の大業は子々孫々万世に続くと考えた。そして旧習を勝手気ままに廃棄し、自分の偏見に任せ

て政治をし、焚書坑儒をおこなって愚民政策をとった。欲望の赴くままに奢侈を窮め、果てしなく人民に労役を課し、中華の地に害毒を流し、彼の死後の戦乱は蛮貉の地にも及んだ。このため二世で秦の祭祀は絶え、大漢成立の資となつたのである。高祖が踐阼し帝位に即き、天下が平安になると、世宗武帝が夷狄を攘つて領土を拡大し、礼学を尊崇奨励し、その制度文明は百王の上に耀いたのである。